

こども こころ からだ

222

仲間とつながり育ち合う

自然とあそぶ青空ようちえん「森の子教室」

主宰 田畑祐子さん

「自分の人生を 自分で創っていける子どもに」



朝一番の「お当番ニュース」に耳を傾ける子どもたち。とんでもない質問が飛び出すことも。



3番さんが山を滑り下りる時には、1・2番さんが見守ります。



「いざという時には守ってくれる安心感として存在しながらも、私は子どもたちにとって仲間であり友達でいたい」と常に子ども目線のゆうこさん。

緑あふれる千里ニュータウン(吹田市)の一角、雑木林が残る「津雲公園(広さ3ha)」を拠点に、活動を続ける青空ようちえん「森の子教室」があります。主宰するのは、元小学校中学校美術教師の田畑祐子さん。園舎もなければカリキュラムもない、自然の中で繰り広げられる少人数約20人での幼児保育の取り組みです。子どもたちは何にも縛られない環境の中で、笑い合い、求め合い、ぶつかり合いながら、たくましく成長しています。

「森の子教室」がスタートしたのは1998年。「子どもたちとはフラットな関係」という田畑さんを、子どもも保護者も「ゆうこさん」と呼びます。

「森の子が自然の中で活動するのは、自然遊びを体験するのが目的じゃないんです。人がつながり合ったり、ひらめき合ったり、考えたり、気持ちを知ったり、心の奥をまさぐり合う…。そういった感覚を持つのに、自然というフィールドが非常に有効だと思うから」と語ります。

教室は、年少(3歳)から年長(5歳)までが一緒に活動する縦割り保育。天候にかかわらず月・水・金の週3回、朝10時から午後3時まで。保護者が公園まで送り迎えするスタイルです。

子どもたちが背負って集合する大きなリュックの中身は、おべんとくに水筒、着替え、シート、カッパ、ビニール袋、はんこ帳など。年長から順番に「1番さん」「2番さん(年中)」「3番さん(年少)」と呼ばれ、みんなを引っばり、まとめ役となる1番さんは、2番3番さんにとって憧れの存在でも

あります。

朝10時、その日のお当番さんの「お当番ニュース(家での出来事など)」の発表から一日がスタートします。そのお話を聞きながら、仲間から飛び出すのが質問や意見、疑問。みんなでワイワイ話し合ってる間に「じゃあ今日は〇〇まで行ってみようか」と、一日の行動が決まってくるのです。

ほかに、木登りばかりする日もあれば、木にロープをかけてブランコにしたり。摘みだての木いちごでジャムをつくりたり。落ち葉に埋もれて遊んだり。お祭りに向けて着物を手づくりしたりも…。

遊具や市販のおもちゃは使わず、自然の中から遊びをつくり出していきます。

雨の日はグラウンドが 大きなキャンパスになるんです

「たとえば1本の棒つれが、電話にも、バナナにも、太鼓のバチにもなる。それから木の太鼓をつくって、演奏会へとつながっていったことも。同じような木でも腐っていると音がかすんで出ないことや、すこい音が出る木があることを知って、想像力と観察力で遊びが広がっていくんです」とゆうこさん。

持ち物だつてフル活用。ビニール袋ひとつでも、水や葉っぱを入れて楽しんで、色水をつくりたり。それを帽子に入れて「ポチャポチャの赤ちゃん」と抱っこする子も。レジ袋は水や運んだり、拾った木切れに袋をくくりつけ虫取り網にしたりと大活躍です。

雨の日は? もちろんカッパを着て外で遊べます。

「子どももその日によって気持ちのトーンが違ふし、雨自体も季節によって変わっていきます。真夏の雨はシャワーと濡れても着替えればいいし、梅雨時のシトシト降る雨もあれば、パラパラ降る雨もある。いろんな雨を感じて、自分で判断し、みんなでのその日の遊びを決めるんです」

津雲公園での雨の中での遊びは、特に楽しいのだといえます。

「いつもの山肌の土がスルスルの粘土状になって滑るし、広いグラウンドはしっとりした大きなキャンパスになって、お絵描きが自由自在。水が流れて砂がたまり、トロトロの泥ができる。ふだんはできない遊びがいっぱいなんです」

子どもたちと同じ目線で一緒に遊ぶスタッフはゆうこさんを含め2人だけ。「大人の色が出過ぎず、バランスが取れて、全員を熟知できる数」なのだそう。少人数にこだわるのは、気の合わない子どもでもなんとかやってほしいから。少し多くなると、好きな子や気の合う子とグループ化してしまうそうです。

「気が合わない人とも、なんとかして心をまさぐり合いながら、気持ちのいいところを見つけ出すという行為こそが、本当の人間関係をつくっていくと思っています」

遊びもイベントも、時間など気にせず自分たちで考え、思いつきやひらめきを大切にしたい。意見を言い合い、判断して、いく森の子の子どもたち。一般の設定保育(幼稚園保育園)ではなかなかできないことばかりです。

「子どもたちのふつとしたひらめきから生まれたものを、自分たちでカタチにしていく。それが自信や喜びにつながり、最終的には自分の人生を自分で創る力につながっていくと思うんです」

森の子で育った子どもたちは、どんな大人に成長するのでしょうか。次号では教室が誕生した背景や保護者との関係などをお聞きます。(次号に続く)

■田畑祐子(たはたゆうこ)
大阪府吹田市生まれ。中学校美術教師、小学校教師を経て、1988年から豊中市の自宅を週末開放して「アトリエ自由学校」を自身の子育てとともにスタート。10年後の98年からは、日常も子どもたちと拠点を一隅だまりの家に移し、「アトリエ自由学校」も継続する。